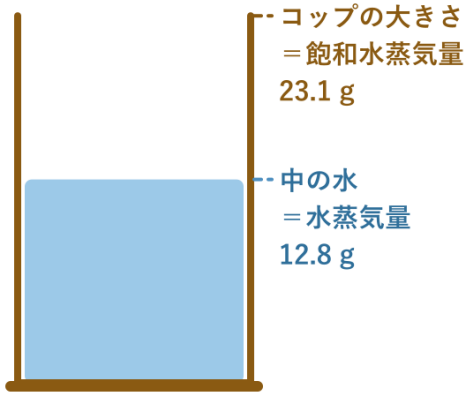
湿度をコップの水で考えるモデル

湿度と水蒸気の量は何が違うのか。気温が下がると、なぜ水滴が出てくるのか

① 気温 25℃



湿度 約55%

12.8 ÷ 23.1 × 100 ≒ 55

冷える →

② 気温 15℃（露点）

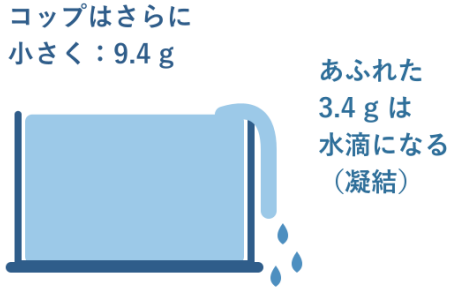


湿度 100%

ちょうどいっぱい

冷える →

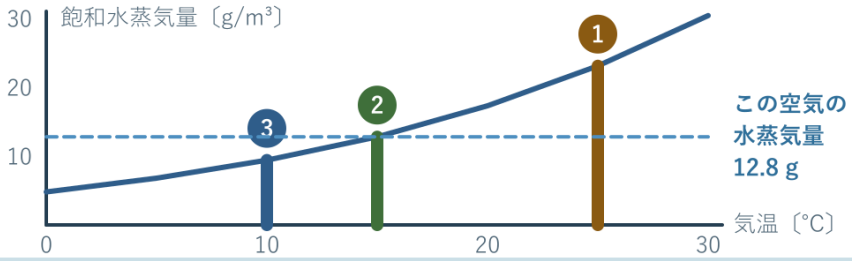
③ 気温 10℃



湿度 100%

あふれた分は水滴に

コップの大きさ＝飽和水蒸気量の曲線の高さ



よくある誤解 ✕ 湿度が上がった＝水蒸気がふえた

①→②で、中の水（水蒸気量）は 12.8 g のまま。小さくなったのはコップ（飽和水蒸気量）なので、湿度が上がる。

湿度は、コップの大きさに対する中の水の量の割合。

空気がコップのような入れ物になっているわけではない。

（気温で決まる、ふくむことのできる最大の量を、コップにたとえた）

※ たとえのモデル。飽和水蒸気量は小数第1位までのおよその値（空気1 m³あたり）。コップの高さを値に比例させた。